

會報

才四卷 才十一号

通卷29号

(Feb. 1960)



真珠研究会伊勢部会

目 次

1. 若い世代に望む
一輸出の現況について……………高島 吉郎…… 1
 2. 真珠業界の将来……………山本 清松…… 5
 3. 真珠研究の現段階……………国立真珠研究所…… 8
 4. 一個入れ挿核について……………阿山多喜也……13
- パロツク** 伊豆地方の真珠養殖雑感……………山口 菊男……19

資 料

- 大分県真珠養殖事業の現況……………大分県水産課……22
- 広島県真珠養殖業の現況……………広島県水産課……24
- 会 報……………27
- 雑 報……………31

表紙写真 「コレハ100万円モスル真珠デス」 品評会審査会場にて
(撮影 Canon VT1.8 フラッドランプ 白井祥平)

若い世代に望む*

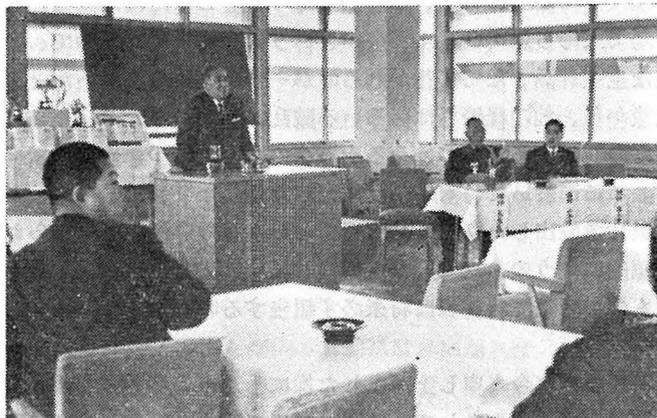
…………… 輸出の現況について ……………

高 島 吉 郎

(日本真珠輸出加工協同組合理事長)

今度、研究会の佐藤さんから何か話をして呉れと御依頼がございましたが、別にこれといつてまとまつたお話が出きないと思いますが、長年、輸出其の他の仕事にたずさわっておりますので、思いつくまゝを皆様にお話ししてみようと思います。

昨年の大体の輸出の状況をみますと、我々が期待した以上に数量及金額共伴



びてまいりまして、一昨年は約72.3億、昨年は83億円と約10億円の増収になっております。それから数量に於いては1万1千貫という数量を出しております。次に平均単価であります、一昨年は2ドルをわつて1ドル90何セントという線が出ておりますが、昨年度は2ドル14セントという平均単価が出ておまして、一番好調な時の単価は2ドル34セントという一番よい結果が出ております。

※ 2月研究会講演録音

これはやはり不良品の輸出禁止という規則を除々に上げていつたという事も相当プラスしているのではないかと我々幹部は話しております。それで伊勢湾の台風によつて輸出の線を昨年度は保留しておりましたが、今年の12月になればその最低線を上げて行こうという案をもっております。

輸出の状況をみますと、やはり相当取扱業者数が増えておりまして、その間の業者同志の競走が非常に激しくなつたという事が最近とみに現われて参りまして、やはり向うの求めるものはよいものという傾向に移行して参りまして、昔は安いものなれば値さえよければ相当出たんでありますが、最近ではよいものでなければ向かなくなつております。

特にキズのある品物は例えば15ドルの値うちがあつても、実際に売ろうとすれば2、3割切らねばはけないという状態であります。それですから我々としましては、そういつた粗悪品を出きる丈出さぬ事に努力すべきでありまして、又、生産の面に於いてもそういつた方に力を入れて行くという風に移行せねば駄目だと思ひます。

だから生産をする皆様はただ莫然と珠を作ればよいのだ……作れば売れるんだという様な事でなく、いろいろ会報やその他をごらんになつて、どういふものが今市場で求められているんだ……という事を御研究になつて、それにミートする様な生産計画をたてて行かれるのが一番いいのではないかと思います。

終戦直後から、他の経済界はいろいろ破乱がありましたが、幸いこの真珠業界は輸出ものびて来ましたが、そろそろこの辺で壁につき当るのではないかと思います。ここに於いて、もう一步工夫した生産なり、輸出に對してもたゞ莫然とした気持で輸出したり商売して行くという様な事は今後考えられない……相当計画的に向うの業者共連絡を密にしてタイアップした仕事の計画と、輸出というものを考えて行かねば将来必ず頓坐する時がくるのではないかという様に考えます。

それで需要の方は今も申しあげました様に1万1千貫という数字が出ておりますし、外国の事情をみましても急激にへつて行くということは絶対に考えられないと、我々外国に行つて見てきましても1万貫前後の輸出は確保出きるという事は自信をもっているわけでありまして、どの位の数量を作ればよいかという事は大体粗製乱造という事もさけて大体1万貫前後のものはここ4、5年の間は輸出出きるのじやないかと我々は考えております。

今年の輸出の計画というものは、大体真珠事業法に基いて計画をたてるのでありますが、伊勢湾台風による被害を大体2割位ロスになるという事を比較的海外の方にも発表されております関係上、輸出目標は約9千貫という線を建て

ておりまして、その9千貫という輸出によつて、金額的には昨年度と同じく80億前後の目標を出そうという案を出す事にしておりまして、平均単価は希望として2ドル50セント位に引きあげた輸出計画をたてたいのが本年度の計画であります。

アメリカの市場は全体の大体50%を占めておるのですが、一番最初は70~75%もアメリカ方面に出ていたのでありますが、最近ヨーロッパ市場の替為管理が緩和されまして、56%がアメリカに出ているのであります。

やはりヨーロッパの市場というものは、いいものを一層望んでおりまして、真珠の歴史というものはアメリカよりもヨーロッパの方が古いという事でありまして、それと真珠の市場というものがヨーロッパからアメリカへ移行したという事でありますので、やはり真珠に對する審美観というものはヨーロッパ人の方が高いという風に思います。戦前に於きまして、真珠の取引の中心地はパリでありました。

それが、第二次欧州大戦其の他で、ヨーロッパに滞在している宝石商がどんどんアメリカへ移り、仕事を始めたという事でありまして、取り扱いの外人の数というものは純粹のアメリカ人というよりもヨーロッパ人の方が多いのであります。我々が戦前ニューヨークに行つております時は實際真珠の取扱業者は20~30名しかいなかつたのでありますが、だんだん増えて参りました。

増えて参つたという事はプラスの面では数量と真珠というものを広くアメリカにどんどん滲透さして行つたという点に於いてその人達のプラスの面でありまして、やはり真珠を愛するという事で取り扱つている業者は戦前から真珠一本できた業者で、真珠の将来を考え販売面に於ても努力されておりますが、戦後真珠は面白いと、もうかるから一つ手を出そうという風にやつた戦後派の向うの商売人というものはそういった考えが薄いのでありまして、ともかく1銭でも5銭でももうければいいんだ……真珠が駄目になれば又綿布でも扱えばいいんだという考えの人が多くのでありまして、我々直接外国の業者と取引する面におきまして、そういう面迄よく研究して、この業者は真珠業界にどういう仕事をやつているんだという事を研究し、利潤追求のバイヤーを相当セレクトして、日本の真珠業の発展に相当関心をもつて努力している様なバイヤーを選んで将来はそういった人と取引きをして、マイナスになる様なバイヤーは規制して行くという事でなければ相当数の真珠業者がいるのでそれらに競走やダンピングがあるので我々輸出業者はそれらについて相当の研究が必要であります。

国内の態勢も大切であります、何といたつても最後の関門である輸出という

事に對し相当向うの業者と研究して今後に對処せねばならない時期が来たのだと思います。

やはり安ければよいのだという觀念でなくて、真珠というものは年に一回の集荷であり需要の方はクリスマスとかイースターとか、これらの時期がなかなかミートしないので、やはり向うの人はそれらのために常にストックとして買っているのでありまして、国内としてはどうしても価格の安定という事をせねば安心して買えない……とバイヤーが一番念願しているものであり、又向うの人はこんないい商売を日本でガタガタくずして行くが、もう少し何とかならないのかという事を非常に言われるので、我々は一致團結してそういつた態勢をとつて行きたいと思ひます。

我々も5、6ミリの過剩対策だとか言つていろいろやつて参りましたが、理論では判つているのでありますが、真珠業界の複雑さというのでありましようか、なかなか理くつて割れない事が多いのであります。

一番主要な産地である三重県の方におかれましても今迄の様な考え方を相当飛躍していただいて、これを一度に方向轉換するのは非常にむづかしいのでありますのでやはり除々に需要にミートする生産という事をやつていただかねばならないし、やはり事業自体は自分を中心と考えられるのであります、それと同時に業界の方針はどの様になつてゐるのだ、どの様に動いて行くのだという事をよくみ極めて、一つ仕事をやつていたゞきたい、それと同時に業界の政策とかいろいろきまつた時には、犠牲も多いと思ひますが、そこをたえしのんで御協力をして頂きたいと思ひます。

将来の業界安定のためには1人や2人の人間が努力しても不可能だという様に考えてきましたし、山勝氏ともいろいろ話をしまして、我々も相当善後策をやつたが、やはり泥繩式で目先にみえるものを一応やろうといつて5ミリ、6ミリの珠をなくしてしまえば市場もよくなるだろうといつて、いろいろやつてみてもあまり効果が上らない……そうすると我々の力にはもう限度がきた……という様な事も話し、やはり全員が一つやろうという気になつて一致していただかなくてはとてもやれない。そんな事が起きなければ我々はもう或程度サジを投げなければ仕様がなんだという極端な話迄したんであります、どうか伊勢の漁協の幹部の方も日夜どうすればいいんだらうと考えておられますし、一つそういう面を相当素直に受け入れて今後の対策をやつて行くという事もありますし、それから私も若いのであります、今後は若い人々がどんどん出て行つて時代の改革をやらねばいかんのだと思ひるのであります、皆様がいいアイデアなり、そういつたものがありましたら、誰かがやつてくれるだろうと

いうのでなく、どんどんと幹部の方なり組合に注告もされて、自分自身でもや
つて行かねば業界は伸びないのであります。

ここにおられる佐藤さんなどにも一つやつてもらいたい……と我々はよく話
しているのであります。時代は若い時代に変つてきたという事を認識されて、
仕事をやつて頂きたいという事でありませぬ。

私がいつでも皆様におねがいしたい事は国内の基盤がしつかりして行かねば
最後という所に響いてくるし、又心ある向うの取扱商社はそれを憂いますし、
又前述の如きどうでもよいという取扱商社はそういう穴をねらつていたのであ
りまして、それが大洪水の如く次から次へと影響が多いのでありますから、こ
ういつた事も御考へになつて、実際に個人でやつておられる事業上について
日々反省なり研究をやつて頂き、又遠慮なく思いつかれたいい案なり、意見
を幹部の方に申し出られて、どんどん意見をはいて頂きたい。私達はこれを今
後の研究会に所属している人々に非常に期待しているのでありますし、業界で
は自分達の仕事もあり組合等の仕事もやらねばなりませんので、どうしてもこ
れらの面におるそかになり、業界としての与えられた務めに對し100%の義務
を果せないというのが我々の悩みでありますので非常に至らない所が多いと思
いますので、そういう点を一つ皆様が話になつて積極的に業界の中に飛び込ん
で頂きたい……という事を私は切に希望する次第であります。

真 珠 業 界 の 将 来^{*}

山 本 清 松

(全国真珠養殖漁業協同組合常務理事)

去る昭和32年に本研究会の御要望によりまして御話し申し上げました時が、
丁度神武以来の人気だと一般業者は有頂天になつていた年に、真珠の養殖は作
業数量のみに拘泥せず上質の真珠を作る事が最大の急務である事を力説して來
たのであります。あれから3年後の今日になつて三重県も農林省も其の方針
で真珠界を指導して來た事を思う時実に欣快に堪えないものがあります。

^{*} 2月研究会講演

今回、又々研究会の為に此の席上に於て皆様と談合するに当り、社会は岩戸景気だと言われている今日に於て、計らずも真珠界は其反對に伊勢湾台風の影響と作業即ち生産过剩の問題、及び共同販売制度の行きづまりについて、再検討を要する点もあり今や業界は正に曲り角に来た事は辞み難い事ではないのであるまいかと思われます。

過去全国漁協が、たゞ単なる入札会を運営していたのを、現在の集荷共販に組織替した年及び其の次年度の1月の入札会は組合も、組合員も、又加工輸出業者も三者一丸となつて、大いに張切り、ありがちないさゝかの間違や運営上の欠陥も吹き飛ばす様な責任感の旺盛な業界発展一途を願うという熱血漢も飛出してお互に緊張した入札会が開かれ、毎回1億円以上の取引をするのが普通の様であり、又加工輸出業者も大いに張切り、たとえ一点でも取らねば恥の様に考え競つて買ったものであります。

然るに本年の1月入札会は2号品と合計しても僅に2千8百万円に過ぎず、1号品は其の内の半額の1千4百万円と言う驚くべき低調さであります。

其の辺の料理や旅館の広い間を利用したブローカー連中の取引でも、こんな小額でない事は御承知の通りでありまして、かりそめにも全国漁協の入札会としてこんな低調な入札会を無為無策に続けている事は、常識では考えられるかと申し上げて過言ではないと思うのであります。

生産部門に於いて言うなれば、作業上のサイズの相違による誤算は有るとしても、生産量に最大の低下を来したとは考えられません。只取り上げるべき問題は、伊勢湾台風による被害は当然ありますが、本年採集した真珠の挿入作業当時の現況から推し計つても、時前に組合の集荷に大きな影響を来すおそれありとは考えられないのでありまして、伊勢湾台風の被害は34年度よりは35年度の採集に大きな変化を生ずるものと思われます。

仮りに最悪な事態のみを積み重ねて考えて見たとしても、本年の浜揚真珠は相当の多額な数量に達する事が想像出来るのであります。

然るに全国漁協に集荷せられた数量は僅かに1千㍻より集荷出来なかつたと言う事は、全国漁協の組合員である処の生産業者として御互に深く反省し、因つて来るべき原因を追求して業界将来発展の施策を御互に考えなければならぬと思うのであります。

又、加工輸出業者の輸出額を考えて見ますと、これとても少ない数量ではない事が御判りの事と思ひます。

32年は大体に於て7千5百㍻程度

33年は 9千5百〆程度

34年は 1万1千〆を越えるのではないかと見ていたのですから、最少限度1万〆は突破しているものと見て差支ないと思われま

す。かくの如き状態に在りながら、一部の輸出業者を除いては一昨年の暮より真剣に漁協を利用して漁協に集荷せられている品から主要数量を買取り、不足分を他に求める様な行き方をする協力的な加工輸出業者が相当数ありまして、組合を支持して来ましたが只今では其反對に主要数量は他に求め、漁協の入札会に於ては僅かにお付き合程度のものを買うか或は特に安い一拾う様な値でなければと、其の行き方が變つて来た事も又生産業者と同じ様に非協力的な結果となつた訳で、数名の加工輸出業者が毎年売残り品を泣き付かれて処分している有様で、こんな姑息な行為が永く続く筈がないので自から進んで覚るべきで有ると思うのであります。兎角現在の行き方そのままに於ては内憂外患、危急存亡の秋とは正に此の事を稱すものと存じます。

此の時に当り組合を此の危機より救出するには、現在の様に形式や旧来の因習に捕われずに、思い切つて切開手術を施すべき時に遭遇いたしましたことは事実であります。然し此の手術は老級のお医者さんで、眼が見えない、手が震う様なお医者様に大手術の出来た例がない。若い張切つたお医者さんに頼るより外ないと思うのであります。

お若い真の生産業者を中堅とする人事の刷新を計り、内容の立直しをせなければ駄目だと思います。そう言つた考えのもとに、私はこれまでも真珠業界将来の発展を願い、業界百年の安定を計る為にも、又今迄申し上げた行きずまりを引き起こさない為にも先ず全国漁協の組織を改善することの必要を説いて来たのであります。

若い新しい考えを持つた人が、運営するに最も便なる様に機構を刷新して、1日も早く老級幹部の退陣即ち自から第1号となるべく力説、且叫び続けて来たのでありますが、事、志と相反し、途中病床に親しむ等の為今以てその目的を達することが出来ず、後進の人々の為に申訳なく、その責任を痛感しているものであります。

共同集荷、販売という大きな仕事を円満に運営する為に理想的な機構を作り上げて、純生産者の若い方々の力強い進出を希つているものであります。

私の本日話しましたことは、過去に於ける失敗を参考として申し上げたわけで、賢明な皆様には何かの御参考になればと思つて御話したわけであります。

真珠研究の現段階^{*}

国立真珠研究所

最近の真珠研究を概観して、これを主として真珠生産との結び付きの観点から次の様に類別することが出来る。

- (1). 真珠が如何にして形成されるかの機構の解明を最終的な目的とするいわゆる基礎的諸研究。
- (2). 真珠及び真珠貝養殖の各技術過程を直接対象として、その改良を目的とする技術研究。
- (3). 前二者と相対的な独自性をもつて解決を迫られている漁場利用の合理化に関する研究。

以下それぞれについて、最近の研究の動向を特徴づけると共に、その焦点とされるものが何であるかを検討してみたいと考える。

1. 真珠の形成機構に関する研究

(1) 生物学的研究

現行真珠養殖技術の中心的過程は、云う迄もなく挿核施術、すなわちアコヤガイ生殖巣組織中への核の挿入と外套膜片（いわゆるピース）の移殖過程である。そして、この移殖外套膜片に由来するところの真珠質を分泌すべき真珠袋の構成が、真珠の形成にとつて不可欠の条件であることも、すでに古くから明らかにされているところである。従つて、真珠の形成機構に関する生物学的研究と云うのは、まず当面真珠袋の組織学及び組織化学的研究にほかならない。この面では、現在までに正常真珠と異常真珠の真珠袋組織の形態的差異、真珠袋形成に要する時間の季節的变化、同じく真珠袋形成に要する時間と挿入される核及び移殖外套膜片の大小との関係が明らかにされており、また特に、真珠袋形成初期において、移殖外套膜片の上皮細胞が一時的に弱い游走性を持つものでないかと推定される知見が得られた事は、真珠袋形成の過程に新しい示唆を与えるものとして注目されるべきことである。

また、組織化学的には、外套膜及び真珠袋におけるカルシウム、核酸、多糖類等の分布が明らかにされているが、これらの分布を更に真珠の形成機構

^{*} 1960年1月20日受理

の一環としてどう説明づけるかはなお今後に残されている。

(2) 生化学的研究

生化学的研究としては、まず貝殻中の色素に関する研究があり、アコヤガイの貝殻中に存在するポルフィリン系色素の主成分は、ウロポルフィリン—Iであつて、ほかにポルフィリン類縁の色素が数種混在していることが判明しているが、この代謝は貝殻の形成機構と関連するものとして今後の課題である。また直接アコヤガイのカルシウム代謝にふれた研究としては、粘液中における蛋白質との結合等のカルシウムの存在形態に関する研究、カルシウム代謝に関与すると考えられる酵素系の一部——Carbonic anhydrase, Alkaline phosphatase, 特にコンドロイチン硫酸との関連における Sulfatase 等に関する若干の知見が注目され、さらにCa⁴⁵ を使用して直接カルシウムの転移を追跡することも2~3試みられている。

(3) 物理鉦物学的研究

物理鉦物学的には、まず直接真珠の品質と関連して、正常な真珠においてはアラゴナイトとして結晶している炭酸カルシウム結晶の形状、大きさ、これをセメントするコンキオリンの厚さ、結晶成長の模様等について数多くの知見が得られ、一部については生理学的条件との関連が追求されている。また真珠形成初期の分泌物の沈着過程についても1~2の観察が行なわれている。現在着目されているものとしては、炭酸カルシウムがアラゴナイトとして結晶するか或はカルサイトとして結晶するかを決定する条件と考えられる貝体のPH及び有機物質との関係がある。

なお、最近テトラサイクリン、弗化ソーダ等を使用する時刻描記法について見とおしが得られた事も、今後の沈着形成機構の研究における方法論としては云うまでもなく、また直接技術的に真珠の色を管理する可能性において特筆すべきであると考えられる。

2. 真珠及び真珠貝養殖の技術研究

(1) 真珠養殖

現在の段階での真珠養殖の技術研究は、主として直接生産者の経験を集積し、試行錯誤によつて積みあげられて来た各技術過程の再検討の段階であると云える。まず挿核施術過程については、当業者間においてもしばしば問題

とされるピースの採取部位と生産される真珠品質との関係について、2～3の結果が報告されている。また内臓器官との位置関係を中心とした挿核部位の組織学的研究も、同様真珠の品質特に異常真珠ないし異常形真珠の形成と関連して進められている。

なおこの技術過程は、その性格として個別的技能的色彩の濃厚なことをその特徴としているが、上記の研究がその克服、特に技術的知識の客観化の意義を担うものであると共に、当業者自らによつて結成されている真珠研究会の活動として、それぞれの経験の交流が活潑に行なわれていることも、同様の意義において指摘されなければならぬことであると考えられる。

次に挿核技術の前過程としてのいわゆる卵抜き（卵止めを含む）も、当業者によつて最も関心を持たれている問題の一つである。これについては、現行技術の比較検討及び薬剤使用による排卵促進の研究が見られる。アコヤガイ生殖腺の組織学的研究もまた直接にはこの過程の基礎として行われたと云う事が出来る。ただし、この過程に関して、特に強調されなければならぬことは、いわゆる卵抜き或は卵止めと云われるのが、決して単純な放卵放精の促進或は生殖腺成熟の抑制ではないと云うことである。即ちそれはあくまで挿核施術の準備過程として、施術に供されるアコヤガイ自体のActivityをある程度に調整することが含まれていると考えられる。つまり一般的に、研究者が特定の技術過程を研究の対象としてとりあげる場合、それはあくまで有機的に結び付いた技術体系の一環として存在しているものであることを忘れてはならない好例である。この意味で、挿核施術の前過程は、狭義の卵抜きを含めて母貝仕立てと呼ぶことがより適切であると思われる。

なおActivityの調整と云うことに関連しては、何をもつてそれを判定するかと云う問題が提起されるのであり、現在までにその試みとして、各器官の組織比重による方法及び鰓の色調を観察する方法が検討されている。

挿核施術を行つた真珠貝の養成過程については、戦後特に多彩な変化が見られるのであるが、その反映として、各種の養成手段の種別によつて生産される真珠の品質がどう異なるか、同じく垂下深度の差によつてはどうか等の試験が行なわれ、また古くから不可欠のものとして養成過程中に数回行われるいわゆる貝掃除（籠の交換を含む）の意義についても再検討が進められている。特に後者については、狭義の意味の貝掃除と籠の交換とを分離して、その真珠の品質に及ぼす影響を試験した結果、籠交換の方が、むしろ真珠の巻きを促進する上で大きいと推定されていることが注目される。

(2) 真珠貝養殖

真珠貝の生産が、いわゆる地貝（天然貝）の採取から採苗養成の段階に発展したのは、戦後であるが、ここでの問題の焦点はまず採苗である。即ち採苗器の垂下によつて得られるアコヤガイ稚貝の豊凶は年により、また漁場によりかなりの変動を避けることが出来ないが、その中で安定した収獲が技術的に要求されるわけである。その一つとして採苗器垂下時期の選定及び漁場の選択の問題があり、このためにはアコヤガイ浮游仔貝の識別及び生態的知見が基礎となると共に、水産試験場等を中心としてとりあげられる採苗予報が、直接生産に結び付くものとして期待されている。またアコヤガイ浮游仔貝の生態的研究に基づいて、採苗器の改良も試験されているが、これもまた稚貝収獲のある程度の安定の意義をになうものと考えられる。

次に採苗後の養成過程については、良質母貝の生産が技術改良の目的とされている。現在の段階で良質の母貝とされているのは、年令の若くて大きな貝であり、従つて養成技術上ではアコヤガイの成長の問題に還元することが出来る。具体的には、漁場の選定、養成手段の種別、垂下深度、籠の収容密度、貝掃除の回数等がこれに関係し、それぞれに関する試験が行なわれているが、特にこの面では、漁村青年のクラブ活動として、試験をとりあげる事例が増加する傾向にあることを特色として指摘できる。

3. 漁場利用の合理化に関する研究

現在真珠養殖漁場の利用に関する問題としては、二つの側面をあげる事が出来る。第一は真珠養殖技術の発達を一本の糸として貫ぬいている品質向上の要求が、当面漁場の利用を焦点とし、優良漁場を求めての新規漁場の開拓が全国的規模をもつて進められていること、第二に、他方三重県英虞湾を中心に、養殖数量の増大がいわゆる密殖或は漁場の老化とされる漁場生産力の減退を招いていることである。浅海内湾の漁場は、本来その立体性、錯縮性、相互規定性の故に、総合的な利用調整の方策が考慮されなければならないと云うことと、特に後者の漁場生産力の減退が個別的な漁場の集約的細分利用の必然的な結果であり、個別経営内部の技術の問題に解消し得ないと云うことの二つは、この問題を他の諸研究から相対的に独自性を持つているとして区別する理由である。

この問題については、昭和34年度以来「内湾貝類漁場の特性区分とその生産性に関する研究」として、内海区水産研究所との共同のもとに研究を進め

ているが、真珠について現在までに明らかにすることの出来たのは次の諸点である。

(1) 漁場の類型区分に関する研究

内海区水研においてとりあげられている懸濁質を中心とした漁場の特性区分については、同水研、三重県水産試験場、及び当所の三者の共同研究をもつて昭和32年10月三重県下の主要真珠養殖場を対象に第一回の調査が行なわれて以来、引続いて三重水試及び当所によつて継続されて来ている。その結果、アコヤガイの棲息制限要因としての塩素量と栄養代謝に関係すると考えられる懸濁質係数とを指標とするところの特性区分についてある程度の見とおしが得られているが、今後のこの研究を発展させるためには、アコヤガイの食性を中心とした生理生態的研究の不足が克服されなければならない段階に来ていると考えられる。

他方、直接生産される真珠の品質によつて漁場の類型を区分する試みは、前者と密接に関連するものであるが、具体的な試験養殖によつて得られた真珠の品質を比較した結果、一般的に真珠の色としてのクリーム、ゴールド系の出現率をもつて、いわゆる化粧巻漁場とされる優良漁場を他と区別することが出来た。また後に述べる漁場生産力の減退とされる真珠品質の低下は、その要素としての巻きの低下に集約することが出来ることを知つた。

(2) 漁場生産力減退の機構に関する研究

三重県英虞湾を対象として、まず試験養殖及び海洋学的条件の観測を行ない、次の様なことを明らかにすることが出来た。

- I) 前記と同様、漁場生産力減退の結果とされる真珠品質の低下は巻きの低下に集約することが出来る。
- II) しかし、漁場による巻きの差異は決して単純な傾向を示さず、このことから品質低下現象はかなりマイクロな現象としてとらえなければならないものと考えられる。
- III) 漁場生産力の減退は、一般に密殖として養殖密度にかゝわるものと、漁場の老化として主として底質条件の変化によるものとの二つの想定が可能であるが、局部的に頻発の傾向にある硫化水素の発生を主因とする真珠貝の異常斃死現象はまず漁場の老化にかゝわるものとしても、より一般的な真珠品質の低下現象については、真珠の巻きの傾向及び観測の結果から、当面密殖の問題と想定して今後の研究を展開することが妥当である様に思われる。

- IV) 別に筏の外部か内部かの垂下位置によつて、アコヤガイの排糞量に明らかな差異の見られたことは、上記の想定と関連してきわめて示唆的であると考えられる。
- V) 前者と同様の垂下位置によつて、真珠の巻きがどうなるかと云うことは、現在試験を継続中である。
- VI) 今後の研究の方向としては、すでに一部については着手中であるが、アコヤガイの飼料と考えられる懸濁質の量的分布及び質的組成、その分布を支配する海水の流れ等を中心とした微細海洋構造が焦点であると考えられる。なおこのためには、これに適した海洋測器を得ることが必須の条件として必要であり、その改良試作が要請されることをつけ加えておく。

一個入れ挿核について^{*}

阿 山 多 喜 也

(有限会社 佐藤養殖場)

最近挿核技術が次第に進歩して来まして、比較的小さな貝に大きなサイズの核を入れることが可能となつて来ました。又近年中サイズ以下の珠の生産過剰と、珠の需用が次第に大きなものに移りつゝあること等により中サイズ以上の珠の生産が大変盛んになつて来ました。処で原核6~7mmもの大きな珠の生産には挿核当時の母貝の大きさは従来の二個入れでは100~110掛位の貝でないと挿核が出来ませんでした。しかし100~110掛位の母貝ですと3年介は勿論4年介でもそうたやすく出来るというわけに行きません。このように母貝の方から行きましても中サイズ以上の挿核はそう容易に行きませんでした。しかし近年に至つて一個入れということが考え出されて来ました。即ち一つの貝に核を一個だけ入れて養殖するものです。この一個入れは従来の二個入れに比べ、貝の割合にして大きなサイズの挿核が可能であり、しかも脱核率、斃死率が少なく、その上珠の巻きがよい等々の利点があり、中サイズ以上の珠の生産の必要性と共に非常に盛んとなつて来ました。

^{*} 2月研究会講演

この一個入れについて私が行いました試験結果の2、3をここにお知らせ致します。この試験は挿核技術の個人差とか貝の取扱の差とかをなくする為に筆者一人が挿核し、以後の貝の管理等も主として筆者が行いました。勿論貝の大きさと核のサイズの関係、珠の巻きの早さ、珠の品質等については各養殖場の立地条件とか、挿核技術者の個人差とかによつて、決して一定しているものではないことは申すに及びませんし、又既に一個入れ作業を行つておられる養殖場では解りきつている事柄かもしれませんが、何かの御参考になれば幸いです。

1. 一個入れと二個入れの場合の養殖成績の比較

一個入れと二個入れとの場合の沖出しまでの成績及び珠の採取時の成績等は第1表の通りで、一個入れ、二個入れともそれぞれ2例をとりました。

第1表 一個入れと二個入れの養殖成績の比較

	挿核期	挿核サイズ	沖出し時の成績		採取期	挿核貝に対する採取貝数の割合 %	挿核された採取された珠の割合 %	珠の成績	
			脱核率 %	斃死率 %				浜揚珠の割合 %	ドクズ+白+ブンドの割合 %
一個入れ	32年7月下旬	6.6mm (約2.1分)	4.1	0	33年10月上旬	83.4	64.3	55.3	44.7%
	33年8月中旬	6.75mm	2.5	3.0	34年12月	80.0	63.0	58.9	41.1
二個入れ	32年8月下旬	袋 2.2分 胴 2.1分	12.0	5.8	33年10月上旬	82.8	55.3	59.0	41.0
	32年8月下旬	袋 2.2分 胴 2.1分	10.4	5.8	33年10月上旬	75.7	47.5	44.7	55.3

挿核時期及び挿核サイズ等が少し異なつておりますが、大差はないとみてよいと思います。こゝで一個入れの一番問題となることは脱核だと思ひます。二個入れですと二個とも全部脱核することはあまりなく、たとえ一個脱核してもあと一個残つておりますが、一個入れですと一個脱核すれば全く母貝と同じことになつてしまいます。ですから脱核率が非常に少なくなければいけないことです。第1表のように沖出しまでの脱核率（沖出しまでは約10日間保養をしました）は一個入れの方が非常に少なく、又挿核された核の数に對する珠の採取された数も一個入れの方が良好でありました。養殖途中の貝の斃死は兩者とも大差がありませんでした。次に採取された珠の成績も兩者ともに余り差がありませんでした。以上より同じような大きさの介で同じようなサイズの核を

挿入する場合には両者の成績にはあまり大差がないようですから、後述の珠の巻きの良否等を別にすれば収量の多い二個入れの方がよさそうです。又、問題となつた脱核も二個入れより少ないという結果が得られました。

2. 一個入れと二個入れとの珠の巻きの比較

一個入れの方が二個入れの珠より巻きがよいことは既に実際に行つておられる方々は知つておられることゝ思いますが、どの程度よかつたかの一例を第2表にあげました。この割合は勿論養殖漁場の良否とか養殖期間の長短によつても異なります。

第2表 一個入れと二個入れとの巻きの比較

	挿核期	挿核サイズ	採取期	浜揚珠の大きさによる分類			
				9mm台	8mm台	7mm台	6mm台
二個入れ	8月下旬 9月上旬	6.5~6.25mm	12月上旬	0.2%	8.8%	77.4%	13.4%
一個入れ	9月中旬	6.5mm	1月下旬	0.7	21.1	77.0	1.2

挿核期は秋期の始めであります、珠の採取期が約1ヶ月差があります。しかし12月上旬と1月下旬とでは的矢灣に於ては珠の直径の変化（巻きの厚さ）が大差がなく、即ち12月以降に珠の巻きが非常によくならないことが筆者の他の試験結果でも明らかなことであります。たゞこの両者の例で、二個入れのものでは袋に6.5mm、浮しに6.25mmと同サイズの挿核でないために浜揚珠のサイズ別の組成に於て7.6mm台の珠の割合が多くなつておりますが、それでも二個入れの9.8mm台の珠の割合が全体の90%と一個入れの割合の21.8%とは格段の差があることより、やはり一個入れの巻きの方が二個入れのものより良いことになります。

3. 一個入れの場合の核の挿核部位について

核の挿核部位には袋と浮し（胴）と二つあります。この二者から採取される珠にそれぞれ異なつた特性の珠がとれることがいわれております。例えば一般に浮しの珠の方が巻きがよく花珠が出る等です。一個入れの場合でも袋に入れた方がよいか、浮した方がよいかか問題です。筆者も両者の挿核を行つた試験をしました。その結果は第3表です。

第3表 一個入れの場合の核の挿核部位と珠の成績の比較

挿核年月日 昭和32年7月中旬 挿核サイズ6.6mm 採取期 33年10月上旬

挿核部位	挿核貝数	沖出し時の成績		採取貝率	挿核された核に対する採取された珠の割合	珠の成績						
		脱核率	斃死率			A	B	C	D	ド	白	G
袋	21.9	4.1	0	83.4	64.3	10	18	18	23	16	7	8
胴	22.0	5.0	0.9	82.2	50.5	15.2	15.2	22.2	18.5	17.4	7.1	4.4

A……花 珠 B……階円、一点傷
 C……傷、シミ D……大傷、突起
 ド……ドクズ G……金色

浜揚珠の巻上りサイズの比較

(珠の大きさの分類)

挿核部位	8mm台	7mm台	6mm台
袋	8.8	88.2	3.0
胴	30.3	69.7	—

最大直径……………最少直径

8.7 mm …………… 6.8 mm

8.7 mm …………… 7.2 mm

先ず沖出し時の成績で、脱核率が問題です。今まで浮しの脱核は袋に比べ多いといわれています。この試験では兩者では差がありませんでした。これは一個入れであつたから浮しの脱核が少なくすんだのであるか又は技術者の得手、不得手の問題であるかは解りません。採取貝の率即ち養殖途中の貝の斃死はあまり差がありませんでしたが珠の採取率は袋の方がよく、やはり浮しの脱核がやゝ多いようです。次に採取された珠の成績ですが花珠の率が袋より浮しの方が多いたことが解りました。珠の巻きの程度は8mm台の珠の割合が袋と浮しては8.8%と30.3%と非常に差が出ました。やはり浮しの方が珠の巻きのよいようです。これは花珠の出現率が高いことなどより見ても浮しの珠の方がよいようです。この浮しの珠の巻きのよいことは二個入れの場合でも云えます。筆者が行いました二個入れの他の試験より二例を挙げますと第4表の通りです。

第4表 二個入れの時の挿核部位と巻きの良否との関係

	標本数	袋の方が巻きの良かったもの		胴の方が巻きの良かったもの	
		例	率 %	例	率 %
第一例	30	25	83.4	5	16.6
第二例	21	15	71.5	6	28.5

この例は厳密に選別し同サイズの核を二個入れて養殖した貝数 100 より袋浮しとも真円無キズの珠が出た場合の珠を測定して比較したものです。したがって挙げる例の数が少ないですが（これは筆者の挿核技術の拙劣さにもよりますが）何れも浮しの巻きがよいことを示めております。

以上の試験結果に基づいて筆者の養殖場に於いて実際的に作業を行つてみました。処が、浮し挿核は技術が仲々難しく個人差が可成りあり、結果としては浮しの方が脱核多く、採取された珠もしみ珠、色珠が多く、袋に比べ思わしいものではありませんでした。しかし浮し（胴）挿核は前記したような多くの利点をもつておりますので、これらの挿核技術面の改良とか適正な核のサイズの決定とか多くの残された研究課題があると思えます。

4. 核の大きさによる養殖成績

挿核部位は袋の方がよいことが解りましたので次はどの程度の大きさの貝ならどの程度のサイズの核がよいか試験しました。色々な大きさの貝と色々な大きさの核との組合せで、多くの試験を行うのが一番よいのですが、これは不可能でありましたので、3年介として一般的な大きさの 130 掛の貝に 6.50mm より 7.00mm の各サイズの核を挿入した結果を挙げます。先ず 130 掛の貝に 6.50 mm の挿核は容易でありますし、挿核の感じとしてゆつくり入るといふ処です。6.75mm ですとわずか 0.25mm の上りでも非常に差があり、感じとして袋がやゝ張り気味でした。7.00mm ですと袋入れの時の脇肉をこす時に手こずりますし、袋に入りますといわゆるパンパンに張ると云つた処でした。この結果は第5表の通りです。

第5表 貝の大きさと核の大きさとの関係による珠の成績
(貝の大きさ130掛)

挿核期	挿核サイズ mm	沖出時の成績		3月X線 検査時の 脱核率%	採取員 の率 %	採取珠の成績			
		斃死率	脱核率			浜揚珠	下珠	白	ドクズ
7月下旬	6.50	8.9	7.8	17.0	67.2	60.9	24.5	5.5	9.1
7月下旬	6.75	3.0	2.5	11.5	80.0	51.8	28.7	6.9	12.6
7月下旬	7.00	21.0	10.0	26.5	56.7	45.6	33.3	6.7	14.4

(数字はすべて%)

浜揚珠の大きさによる分類

挿核 サイズ mm	珠の大きさの分類 (mm)						
	8.75 <	8.50—8.25	8.25—8.00	8.00—7.75	7.75—7.50	7.50—7.25	7.25 >
6.50	—	3.0	12.0	17.9	29.9	26.9	10.3
6.75	2.7	9.5	12.0	20.3	29.7	25.6	—
7.00	9.8	24.4	29.3	19.5	14.6	2.4	—

先ず7.00mm挿核は学識的に云つてもよい結果は出ると思えません。やはり沖出し時に既に脱核が10%も出てしまつておりますし斃死も21%の高率でした。採取した時の貝は最初挿核した時の半分にへつてしまいました。採取された珠の成績も三者中最も悪かつたです。次に6.75mm、6.50mmこの両者はあまり大差がなくドクズ、下珠の率がサイズの大きくなる程多くなつております。これはやはり大きな核程無理となつていくことが解ります。次に巻上りの珠のサイズ別の組成ですが大きな核を入れたものゝ方がやはり大きな珠がとれております。しかしくら大きな珠がとれるからと云つて2年養殖貝で50%の斃死が出てはこれは問題になりません。この採核サイズ(即ち採取される珠のサイズ)と貝の大きさの点は非常に大切なことゝ思います。貝に無理をさせないようにしてしかも大きなサイズの核を入れること、これは各養殖場ごとの問題だと思ひます。

以上が筆者の行いました試験結果です。しかしこの一個入れをどの養殖場も出来ると云う訳けにも行かないのではないのでしょうか。前記した如く養殖漁場

の良否とか、挿核技術の優劣によつてその成績が決定され失敗した場合にはその損失は二個入れに比べ非常に大きなことは申すまでもありません。しかし一個入れ養殖はこれから益々研究され進歩して行き、盛んになる養殖技術と思ひます。

最後にこの試験の珠の分類等に御助言下さりました当社社長佐藤忠揚氏、及び養殖場の資料の参考をゆるされた当社専務竹中喜久三氏に厚く御礼申し上げます。

Baroque

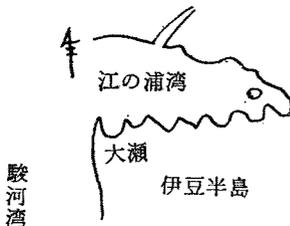
伊豆地方の真珠養殖、雑感

不二浦水産真珠部
山口 菊 男

現在漁場老化が大きな問題に成つている事から三重より県外に新漁場を求めて、都々浦々で開拓者が毎日研究に努力されていられる事と思ひます。筆者もパイオニア一年生として、雪化粧された麗峰富士を湾口に見る富士箱根国立公園の一隅、大瀬岬へ希望に胸ふくらませて、33年1月赴任し、以来丸二年を過ぎた現在迄、自己をふり返えるひまもなく過して参り、今冬作業も一段落し、当研究会員として御無沙汰していましたが、当漁場に就いて、この二年で体験

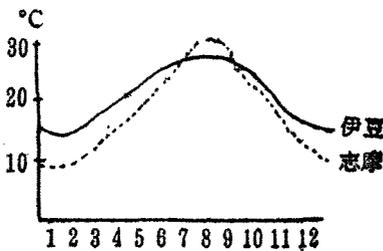
したまゝを雑然と記し会員皆様の御指導を賜りたく思ひます。(注、当漁場に限り自分の感じたまゝを記す為、間違つた所が多々有りましたもお許の程)

此処大瀬漁場は駿河湾中の江の浦湾口で伊豆地方の漁場として最西端に有ります。湾口が広く南に山を背い、東西が岬に抱かれ北に富士を眺



めて湾口が広がっています。湾の特長として、三重特に英虞湾に比較して湾奥行より湾口の広い事、これにより筏と養殖方法も大きく変つて来るのではないかと考えて、通称清水式 (Vol. 4, No. 8~9 Baroque. 阿部参照) を使用しているのですが、当漁場としてはあまり大型すぎるので現在1台 $12\sim 14^{\text{m}} \times 30^{\text{t}} = 360\sim 420$ 吊の筏を使用し殆んど金網籠にて懸垂しています。

次に水温ですが、外洋性の潮流を直接受ける影響が強く冬の水温が平均 15°C 年に最低として $12\sim 13^{\circ}\text{C}$ と云う日を2~3日見る程度です。それに夏期になつてもその割に昇らず志摩が高温の為、斃死を見る頃も $26\sim 27^{\circ}\text{C}$ で最高 28°C と云う日が数える程より有りません。伊豆地方は年間に水温カーブが志摩に比較



し、なだらかです。水温としては恵まれた環境に有るのですが6月頃より8月にかけてフジツボの甚しい事は、志摩等の業者の方には御想像も出来ないものが有ります。最も甚しい時には施術した貝が翌朝フジツボの付着で真白なのはおろか、施術前に貝立を行い金網籠に入れ吊しておくのですが施術を行うのに揚げた時

はもう白いフジツボの付着を認める事すら有ります。この様な状態ですから当地の最も多忙なのはこの時期で、海事の作業と云えば、猫の手も借りたいと云う形容詞そのままです。少しでも遅れれば斃死を来しますし、斃死を見るに至らなくとも母貝等に於ては、端先を痛めそこに丈きく傷跡を残し施術の時に開口器による割貝を作る原因とも成ります。

然し一たんこの魔の3ヶ月をすぎ台風シーズンが訪れる9月に入ると、貝の発育が見違える程良く、又付着物がなく、台風対策で掃除が遅くなる様な事が有つても、掃除に遅れると云う程、付着物がない事です。その良き例として9月に施術し9月末~10月に沖出したものをそのまま越冬しているものもあります。

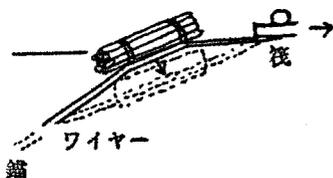
尚この頃から抱卵したものも殆んどなく、その上、貝肉の肥満が伴い、フジツボ付着時期に施術のスピード低下をおぎなうことが出来ます。筆者が志摩にいた頃は9月をすぎると抱卵したものは比較的少いのに対し貝肉が衰弱気味のものが多かつた様に記憶します。当漁場に於ては、出来上つた製品に就いても、この事が立証出来るのではないかと云うのですが、狩野川台風により全滅に近い被害を受けたのではつきりしたデータでは御座いませんが、生残りのわずから見て8月物に比較して9月物がその品質に於て一役勝っていました。この

9月より海事も楽に成り、避寒の準備も不要と云う事で全力を揚げて施術にかゝるのであります。この様な環境ですので11月中旬まで施術を行うのですが、この頃でも水温は20°Cを降る様な事はありませんが、富士下しの寒風に気温との差が甚しく成つて来るので11月中旬には施術を終る様にしています。

処が此処にも開拓地のなやみとして、第一に母貝が自給自足出来ない事があります。最近では各業者が採苗を試みている様ですが、湾の特質として、湾口が広く潮流が強い為、採苗に適した場所もなく、思わしい成績が見られません。

そこで殆んど三重より稚貝、母貝を購入しているのが現状です。その時期として、当漁場は水温と気温の差の少い5月初旬を毎年その時期としていますが、計画により秋の一部を購入する事もあります。秋に購入したものは春先に於て斃死を見る事が多いので、年頭の計画により殆んど春購入し、トラック便にて、ミカン箱に4~5メ匁ずつ入れ、夕刻購入地（三重）にて積み込み夜行にて沼津まで10時間前後の陸送を行つています。船や汽車にて輸送した事も有りましたが、経費や斃死率から見て、現在の所この方法をもちいる様に成りました。

此の様にパイオニアの希望に燃えて、新漁場に赴任したものの、33年の22号、34年の7号、15号と2年連続の台風に見舞れ、22号台風では、錨の引けたもの、錨の引けないものは、筏が折れるか、ワイヤーが切れたと云う様な事で34年度に入り、何んとか筏に働くこの力を少しでもやわらげる事が出来ないかと考えた末、当漁場に於て同経営で大謀綱を張つていのですが、それに「ポツボウ」



と云うものを使用しているのです。その原因を使用してはと云う事で、力の干渉体とでも云うべき「ポツボウ」を真珠の筏に取り入れる事にしました。その原理は左図の様なものですが、筏に力が加わると、「ポツボウ」の浮力に応じその力が「ポツボウ」により打消されると云う事です。

これをとりにつけた為か、34年の台風の時は宿舎の2階が吹飛ばす被害を受けたのに、筏はわずかに錨の引けた程度で無事でした。

此の様に各新漁場で色々と、パイオニアの皆様が色々御苦心なされている事と思います。筆者も三重に生れ、三重の海で養殖に従事して来た者が、新漁場で養殖に従事する場合、今迄三重の海、三重の養殖方法を基礎に仕事をする事が時によつては、非常に邪魔になる事すら有りましたが、又新しい事を見い出

して、それが新漁場に適応する様なものである場合は、三重と比較し乍ら、何か新発見をした様な、うれしい気持ちになる時だけが、バイオニアとしての唯一の楽しみにもなり、又新たなフアイトが燃え揚ります。筆者と同じ立場の方々にも、きつと同じ体験を持たれた事とおありの事と思います。

此の様に、まだまだ研究途中に有る状態ですし、その上今年採集すべきものを22号台風で流失し、これと云うデータもないまま、投稿致し会員皆様のお叱りを受ける事と思いますが、何かと御指導戴き、参考に致したく思います。

大分県真珠養殖事業の現況

一養殖場としての素質は充分一

大分県水産課

真珠養殖事業の沿革

大分県の真珠は、戦前まで佐伯湾、入津湾で天然母貝を採取していた程度でしたが、真珠養殖試験としては、県水産試験場が、南海部郡蒲江町楠本浦（入津湾）を中心に、大正7年大村湾の高島末五郎より、大正8年には三重県布施田漁業組合より、大正9年には高知県宿毛町予土水産KKよりそれぞれ母貝を購入して移殖し、その養殖を図った。

続いて昭和4年三重県の人小川某の兄弟が入津湾西之浦と、佐伯市狩生（旧西土浦村）の二カ所で、三重県産母貝を使用して真珠養殖をはじめたが、経営不振のため、3カ年して事業を中止している。

戦後、漁業改革を転機として、沿岸漁業行き詰まりの打開策として、真珠養殖業が県南漁村で問題となり、昭和27年高山三重県水産試験場長（現国立真珠研究所長）一行の現地調査となつた。これを契機として、入津湾の稚貝の採苗と母貝養殖業が勃興し、業界の脚光を帯びるに到つた。

これよりさき、昭和24年みつわ真珠工業KKは、佐伯湾の霞ヶ浦地区に進出し、真珠養殖を開始していたので、こゝに入津湾の母貝養殖と、佐伯湾を中心とした真珠養殖とで、本県の真珠養殖事業は本格的体制に入つた。

その後、真珠大手筋、三重県業者の県南海域への進出となり、逐年漁場は拡大され、地元漁民による母貝生産とともに、真珠の生産は飛躍的に増大された。

真珠養殖の状況

前記昭和27年以来、本県真珠養殖事業は急速に伸展した。その生産の推移は表のとおりである。

漁場の中心は、県南津久見市日代（津久見湾）佐伯市（佐伯湾）南海部郡入津湾、猪串湾、未水湾であるが、特に佐伯湾は化粧巻漁場としてすぐれており、入津湾、猪串湾は貝生産地帯として好適な条件を備えている。

このように、県中部以南、宮崎県境にいたる延々350軒に及ぶリアス式一帯では真珠養殖が行われているが、これら養殖場は、一般に冬期は高温高鹹、夏期は低温高鹹の外洋的性格を帯びているが、山岳重るいの地形と年間の降雨にめぐまれ、湾入したところでは、かなり沿岸性の海況を呈しているので、養殖場として、充分な素地を具えていると思われる。

む す び

しかしながら、真珠養殖事業の振興策は、資源の培養とともに、量産による密殖の防止と、養殖技術の改善、向上に重点を指向、あくまでも良質真珠の生産に目標をおいて、大分県の特産として、真珠養殖事業を育成強化して行くことが今後の重要課題である。このために漁場の再検討を行い、強力な計画生産を打ちだして行くことが肝要である。

表 1. 年度別真珠施術介数と真珠浜揚量

区分 年度	施術目標 数	施 術 介 数				真 珠 浜 揚 数 量				備 考
		大珠	中珠	小厘 珠	計	大珠	中珠	小厘 珠	計	
昭和	千介	千介	千介	千介	千介	千介	千介	千介	千介	施術済介 の移殖分 をも含む
31年	152.4	35	32.5	84.9	152.4	—	—	5.9	5.9	
32	300	601	1,489	1,773	3,863	—	4	27.9	31.9	
33	600	1,055	2,056	1,897	5,008	14	25.9	34.5	74.3	
34	2,610									

(注) 34.5月現在 枠移転(持込)90千介、施術済員の移殖(持込)1,450千介

表 2. 漁 場 利 用 状 況

区分 年度	真 珠 貝 養 殖 場			真 珠 養 殖 場		
	筏台数 台	免許面積 坪	筏1台当り の面積 坪	筏台数 台	免許面積 坪	筏1台当り の面積 坪
昭和31年	551	287,500	500	261	475,500	1,821
32	1,122	299,400	266	888	580,600	653
33	1,787	585,900	328	1,861	1,029,000	551

表 3. 経営体別事業状況表 (33.12.末現在)

経営体名	経営体数							漁業権数(真珠貝)		漁業権数(真珠)	
	~10	11~20	21~50	51~100	101~500	501以上	計	漁業権	筏台数	漁業権	筏台数
漁協	4台	2台	1台	1台	1台	1台	8台	7件	795台	6件	9台
会社	—	—	—	2	2	1	5	1	143	23	1,613
個人	24	32	6	2	1	—	64	5	849	5	239
計	28	34	6	4	4	2	77	13	1,787	34	1,861

(「真珠」より)

広島県真珠養殖業の現況

—広い漁場で良質真珠を生産—

広島県水産課

広島県の真珠養殖事業は、昭和24年に水産試験場の委託事業として開始、その後沿岸漁業の不振打開策として、昨年は7,300,000貝が養殖され、今後ますます有望漁場として注目されている。

1. その由来

広島県の真珠養殖事業は、古くは昭和の初期に安芸の宮島を中心に行われていたことが、中国風土記に記されている。これは宮島と真珠との組合せは、あながち考えられないことではないと思われる。

これの裏付けにしては、底びき網等によく「あこやがい」が、かかることで立証される。しかしその数量は、天然に発生した数量にしては、一寸おかしい点もある。それが殆んど老貝である点もおかしい。この他海田湾で「あこやがい」がとれて、見て呉れと云つて来た人もある。

古くは以上の通りであるが、最近に至つては、戦後昭和24年水産試験場の委託事業として、佐伯郡沖美町に大変熱心な人がいて、この人に昭和27年迄試験研究をして貰つたその結果、本県でも、結構養殖が可能であることが立証されたのが、今日、本県真珠養殖業が盛んになつた根本の原因であり、基礎である。

2. その後

さて以上のような状態で、本県でも真珠養殖を計画し立案している処へ、昭和27年3月頃と記憶しているが、三重の業者であるみつわ真珠工業株式会社が飛び込んで来たのが、他県業者が本県に進出した最初である。

爾來昭和31年頃迄、全くみつわ真珠が本県海面の好適地を、悪く云えば独り占めにしたと云つて過言ではない。反面水試が一応真珠養殖が可能であると立証したとは云え、企業として乗り込んで来て、本格的な事業に着手したことは、今になつて思えば、相当危険なことであつたと思う。それが成功したことが更に本県の真珠養殖事業に拍車をかけたことはいなめない事実である。

しかしこの間みつわ真珠の苦勞は相当なもので、水温、比重、潮流等の調査を現地の人々に依頼をし、更に水産試験場の各種データと比較対象する等、会社をあげて真剣にこの事業に取り組んでいた。後日みつわ真珠に対する兎角の批判の声を聞かぬでもないが、企業である限り利潤の追及は当然のことである。今は故人であるが、みつわ真珠の前社長三輪豊照氏の御勞苦に對し深甚な敬意を表したい。

3. 現 状

空前の真珠ブームが訪れたのはこの頃であつた。チンチンドンチャンと鳴りもの入りでPRよろしく乗り込んで来た。結局当初の予定通り本県水産業の企業誘置のつもりでどんどん免許した。

ところで吾々は昭和32年になつて、改めて真珠事業の在り方を検討した。ところが本県の特産のかき筏漁場の免許面積を上廻る免許面積が数字の上で現れた。そこで、いろいろ検討の結果、真珠事業は、本県ではこれ以上増殖を許すべきでない、という結論に達したので、所謂ストップ令を原則的に定めたのである。従つて現状では、

県内業者	9	(479台)
面 積	420,750	平方米
県外業者	8	(3,065台)
面 積	7,111,170	平方米
計	17	(3,544台)
計	7,531,920	平方米

漁場の行使については非常にゆつたりとした使い方、この点吾々は非常に満足している。即ち1台当りの平均面積は2,415平方米で、おそらく全国優位であろうと思う。

また全般的には免許の場合も、棧橋を作るとか、或いはその他の施設をする

必要な海面だけの免許に止め、実際に使わない浅いところは全部カットする等極めて芸の細いところまで、気を配った免許をしている。

また昭和23年4月30日に県規則55号で「漁貝の標識の設置に関する規則」を制定し、筏の台数の確実な把握に努めている。これらも究極の目的である品質の良い真珠の生産ということに、吾々も業者も努力を続けているためであろうか、どうかは解らぬが、本県の真珠に、極めて良質である点よろこばしい。

4. 稚貝の採取

従来本県の海面の水温が冬期8度以下に降るため、業者の殆んどが他県に避寒しているのが現状である。

そこで考えられるのは施術した貝を、他県からもつて来て、本県で所謂総仕上げをすることを業者が考えて来たのが、本県の真珠事業であつた。ところが事業法の関係で、施術貝の割当制度が行われたため、この単なる化粧巻きがやりにくくなつた。

そこで吾々としては、他県産の貝だから、本県の自然的条件にたえられないのであつて、本県で稚貝の採取ができれば、これにたえられるのではなからうかと考えて、採苗に着手するよう業者に要望して来たところ、昨年からある程度採取に成功したので、これを本県内の需要を充す位のものは、生産することを考えれば、避寒の問題も自然に解消するのではないかと思われる。

しかもこれを本県内の漁協の事業としてやれば、逼迫した漁村の経済に、いくらかでもプラスになれば幸いと思つている。またその位の恩典がない限り、真珠業者が毎年水揚げする金額からみれば、当然かも知れない。

5. 終　　り　　に

最後に、日本の真珠の輸出がその生産量の98%ということで、外貨の獲得に一役を買つているのであるが、さて水産庁が関係県を督励して、良質の真珠生産のための措置を考えているが、真珠事業法の制定された時と、今日の社会状況が大部變つて来ている。従つて、私は法律そのものを改正するか、もしくは廃止して新法を制定するかし、強力な規制制度を打ち出さない限り、この問題はむつかしいと思う。更に吾国の独占的眞珠養殖事業であつてみれば、少くとも、各県に對する指導費を出して、強力な指導を実施しない限り、今日の地方自治体では、満足な指導もできないと云つてよいと思う。貴重な海面を使用して生産された眞珠は「三重眞珠でございます」と云つて売られたのでは、本県の漁民は可哀想である。私は「原爆眞珠」とても銘打つて、新しいアイデアで売り出そうかとも思つている。

(「眞珠」より)

審査そのものも極めて慎重、且厳正に行われました。

前日来各新聞社の伺いや、テレビ取材の希望もありましたが、我々運営委員としましては初めての事でもあるので、何事についてもふたを開けないと判らず、不安でもあつたのでことわり続けていきましたが、当日幸いな事に大盛況である上に、N.H.K テレビ、東海テレビが非常な関心をもつて1日中撮影され、又各社の報道陣もこられて本心からホツトしたのであります。

良質品の展示には業者の関心が深く、当日すでに来年のためによいものを作ろうという声があちこちから聞え、目的は十分に果され、良質真珠生産に大いにプラスになつたと確信した次第であります。

この有意義な催しをこれからも継続させるべく業者の皆様で第2回にそなえて準備されん事を希望しております。

出品受付

当日午前9時より正午迄

一点づつ出品票（氏名、サイズ、数量、漁場名、作業時期、浜揚時期）をつけて申込む

審査委員（当日出席の方）

佐藤忠揚氏（全国真珠漁協常務理事、研究会代表幹事）

高島吉郎氏（日本真珠加工協組理事長）

西岡光夫氏（全国真珠漁協副組合長）

松尾圭起氏（全国真珠漁協組合長、全国真珠評価委員長）

山本清松氏（全国真珠漁協常務理事）

山本 勝氏（市価安定対策委員長）

入 選 者

特 選（全国真珠養殖漁業協同組合長賞）賞状、カツプ並副賞

志摩郡大王町船越 田中正司（富士水産）

10ミリup. 0.45匁(1ケ)

船越作業（30年7月）→的矢仕上（34年1月）

特 選（日本真珠振興会長賞）賞状、カツプ並副賞

志摩郡磯部町の矢 佐藤養殖場

10ミリup. 0.8匁(2ケ)

的矢作業（30年7月）→的矢仕上（33年1月）

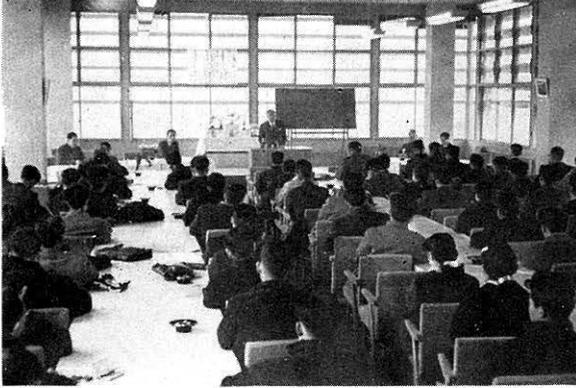
特 選（真珠研究会伊勢部会長賞）賞状、カツプ並副賞

鳥羽市 御木本真珠会社

11ミリup. 5.6匁(10ケ)

浜島作業（30年5月）→広島仕上（34年11月）

研究会風景



東京から
招聘した
高島加工組合理事長



業界の長老
山本清松氏の
講話



真珠会館三階は
一杯になる程の
盛会であつた

才一回品評会風景



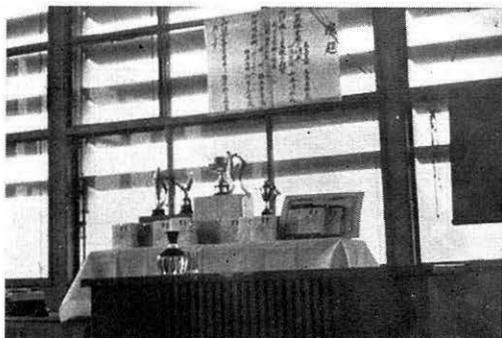
審査風景



一般公開



審査発表



賞品の数々



入選品

特選 (真珠研究会伊勢部会長賞) 賞状、トロフィー並副賞
長崎県 壹岐真珠株式会社

9ミリup. 0.9匁 (3ヶ)

壹岐作業 (32年9月) → 壹岐仕上 (34年12月)

準特選 賞状並副賞

度会郡南勢町礫浦 中村忠臣

8ミリup. 5匁

礫作業 (32年7月) → 桃取仕上 (34年12月)

準特選 賞状並副賞

長崎県 壹岐真珠株式会社

8ミリup. 0.9匁 (4ヶ)

壹岐作業 (33年8月) → 壹岐仕上 (35年1月)

準特選 賞状並副賞

伊勢市 富士真珠株式会社

8ミリup. 20匁

浜島作業 (33年6月) → 的矢仕上 (35年1月)

準特選 賞状並副賞

度会郡南勢町礫浦 上野孝

7ミリup. 9.5匁

礫作業 (33年7月) → 松下仕上 (35年1月)

準特選 賞状並副賞

志摩郡志摩町間崎 山楠真珠有限会社

7ミリup. 7.3匁

間崎作業 (33年6月) → 鳥羽仕上 (35年2月)

準特選 賞状並副賞

志摩郡大王町船越 田中正司

4ミリup. 15匁

船越作業 (34年5月) → 的矢仕上 (35年1月)

出席者

三重大学：藤田

国 研：太田、植本、丹下

三重水試：野本、木村、山口

振興会：高山

加工組合：高島

買取会社：山本勝

全国真珠：松尾、西岡、山本清

安田、伊原

母貝組合：協

水産高校：宮内

片田 中学：茶木
共栄 水産：大須賀、若林、
 樋口
三協 真珠：入交
真和 真珠：浜地、稲葉
速水 真珠：速水
中甚 真珠：中村
北村 真珠：竹内
富士 真珠：森岡
佐藤養殖場：阿山
鏡 真 珠：中山
浜文 真珠：浜口
堀口 真珠：新
加藤 真珠：加藤
大月 真珠：近田、青野
井上 物産：井上
糸川 真珠：糸川
御木本真珠：
浜久養殖場：村田
船 越：山際啓、山際新、
 山際茂、田辺寛、
 太田、喜田、山際
和 具：伊藤、山本徳、
 北井正、北井た、
 大山薫、田野上和、
 田野上武、岩城、
 磯和徳、大山
神 明：大東
鵜 方：西尾
間 崎：山本達
的 矢：小田中、森本、
 堀口、西村、大形
布 施 田：浜口増、田畑良
立 神：原条

片 田：平賀清
浜 島：谷水、山崎
南 海：阪口、伊勢谷行、
 城、伊勢谷正、
 田中、村田忠、
 伊勢谷重、谷口、
 山下、加藤、
 西本忠、西本孝、
 中村勉、中村昭、
 浜口、道清
五ヶ所：川口、橋川、幸田
 協、脇海道
阿 曾：山川、下村、木村
紀 州：奥村清、和泉、
 奥村菊、植村、柳
和 歌 山：石野
愛知県篠島：鶴賀
沼津市大瀬：山口
鳴 門 市：本田
研 究 会：佐藤、山本一、
 山本文、高橋、
 山本清、久米村、
 白井、谷
NHKテレビ、東海テレビ、
NHK、中日、毎日、産経、
伊勢、読売、朝日各新聞社

昭和35年2月31日発行

第4巻 第11号会報 (非売品)
(通巻第29号)

編集委員 白 井 祥 平

三重県伊勢市岩淵町84番地ノ2

真珠会館内

発行所 真珠研究会伊勢部会
電話(伊勢局代表)4147番

三重県伊勢市岩淵町140

印刷所 神都印刷株式会社
電話(伊勢局)2230番